

## 中世の神仏習合と識緯思想の役割：日本陰陽道史の一齣として

著者	岩佐 貫三
著者別名	IWASA Kanzo
雑誌名	漢文學會々報
巻	21
ページ	1-5
発行年	1962-05-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00148536">http://doi.org/10.15068/00148536</a>

# 中世の神仏習合と讖緯思想の役割

——日本陰陽道史の一齣として——

岩 佐 貫 三

日本に於ける本迹思想史なり、神仏思想の習合史なりの史的経緯上に於て、日本神道の仏教化を考えるか、中国仏教の日本化（敢て神道化と僭称しない）を考えるか、は問題であらう。そして又標題の如く、平安末期より中世時代に於ける神仏習合思想への中国讖緯思想の介入や介入の形式を如何に考えるか、神仏思想と同等位置に於ける讖緯思想やその母胎となった陰陽思想の習合を如何にみるか、などの前行すべき問題もあるであらうが、併し論者は一応常識的な見解に基いて、「神」と「仏」の相對關係と、その中間に介入する夾雜思想を分析するという概念に基いて、論究をすすめてゆこうと思う。勿論、「中世」と制約すべき論題の収約性も妥当でないかも知れないが、それもあつた時期の習合史——特に平安末から室町初頭にスポットをあてて——に、既に固定し、又はしつつかある中国思想、——特に陰陽道、宿旺道、讖緯思想——の介入並びにその基盤としての道教の關連についての説明が、ある意味の日本民族の精神

史の側面の一部（筆者の考える日本陰陽道史）を、系統立てることにもなるであらう。まづ、論点の中心を、

①中古以来の山王権現思想と熊野思想の習合抱着

②中古天台思想と宿旺道の請来

③諸道勘文類の考察

④篋篋内伝の検討

等におきたいが、特に今回は③④の二つの論点について扱いたい。

時代は中世より稍々遡るが、長寛元年（西暦一、一六二年——応保三年が改元）に藤原忠重等が熊野社領を押取せんとした際、熊野本宮々司から提訴された時の長寛勘文（正類從卷四六二）所載の例の熊野本宮縁起にみえる年紀の方法なり十二所権現本地垂迹習事（金峰山秘密伝）にみえる不老思想なり、熊野本宮古記（統類從卷七十六）にみえる泰山府君思想なりを、勘案して考えられることは、中世本迹思想の靈山たる熊野権現に介入する本邦修驗道思想の複合要素の一

として、正に中国讖緯思想の役割を考へることは、強ち論理の飛躍でもあるまいと思はれる。この文中にみえる所の王子信の信とは晋の誤にして、周靈王の太子が仙人となり、浙江の天台に入ったというその山に、国清寺という天台伽藍が創められたと伝えられ、その「山王」に地主・山王元弼真君が、祀られたという事実や、延暦二十三年（貞元二十年）、入唐中の最澄がここに遊んだという事実などから推して、山王権現思想と熊野権現との抱合を、修験道史の裏面から打出した、と考えられる面があろう。さて中国に始つた讖緯思想は、本質的にあく迄、呪術的民俗信仰であり、緯学思想は勿論、政経的学問体系にも進展して行つたが、資稷下派の学問体系として、我國に渡來する前に既に混然とした革命思想を伴う予言思想となり、平安期にあつては、図卜や占星呪術等の民間信仰として、正統的な神道思想や、仏教思想とは、截然と區別されて居つた。では、これらの諸思想が、何故陰陽思想なり、五行思想なりと、抱合せねばならなかつたか。ここに中古天台時に請來の宿旺道の存在を考へねばなるまい。なる程、幼稚な構想の思想体系ではあるが、この介入思想の存在意義は無視し得ない。続本朝文粹にみえる保元四年の藤原実行の記事や、古今著聞集の康治二年の藤原頼長の行法なりから考へると、この頃の舶來思想の再認識は、特に必要と感ずるのである。それ故にこの期の予言的思考たる「勘文」なる形態を、資

料として考へてみようと思ふ。

この勘文なるものの性質は、宿旺道なり、陰陽師の専門語である筈で、この「勘へ申す文」に於て、古代の自然現象を理論化し、文証化したこの特殊文が、幾変更して當時の明法道や、明経道や、天文・曆法道などの、故事故実の調査報告書になるのであるが、この幾多の革命勘文なり、諸道勘文なり、その他の勘文例にみえる図讖思想を、私は前述の介入思想たる讖緯思想の文証の一として、重視したのである。

更に問題の例の箆盤内伝（伝安倍晴明撰、金鳥玉菟集―続類從本）を、一応、鎌倉初期の作文と推定したる基盤に立つて、この前文にみえる莊子の逍遙遊篇思想なり、道・老思想なり、方術、方位、四神相應等の複合思想なりを、今尚ほ払拭し切れない現代の社会生活に、この習合思想の根強さを改めて再認識し、同時に中世の神仏思想の主客相関の順位なり、本迹関係なりを、新しく取り上げねばならないのである。

ここで長寛勘文なり、諸道勘文なりの資料を、中世資料とすることは適當でないので、主として吾妻鑑にみられる陰陽道の勘文なり、「箆盤内伝」の初期のものを、材料として考へたい。

例えば吾妻鑑にみられる四十五種以上に亘る陰陽道の儀式には、当然、讖緯思想のものとして考へられるいくつか

の行事があるのである。元々この渡来については詳にし得ないが、純本朝文粹には保元四年、藤原実行がこれを行つた由が見えているし、又、古今著聞集には康治二年藤原頼長が行つて居る由もみえて居るから、この頃、既に渡来して居つたものと思はれる。讖緯説は、奈良朝以来の天人感應説と、平安朝に盛行した陰陽五行説を母体とし、天地宇宙間の異常なる祥瑞災異を、君主の政道に対し、「天」が賞讃し、又は、けん責するという儒教的思想を、勿論含んで居るが、民間に下つては、相当卑近な雑信仰と抱着して居る事も見逃せない。かの妙見信仰（多羅羅信仰）（北辰尊星信仰）に就いても、これに類似したケースとして考えたい。更に摩多羅羅信仰が大黒天信仰へと変化する過程には、相当雑信仰からの要素も含まれるが、けだし特異な民間信仰への讖緯思想の習合であろうと思う。

又、平安朝末期からの諸仏教の密教化なり、当然こころり中世に将来されるころの宿旺道に着眼しなければならぬ。円珍の渡唐のえにしを辿るこの雑道に多分に讖緯思想のもられて居ることは勿論である。七旺と七仏なり、廿八宿説より考えられる両者の星占等にみられる諸思想は陰陽道なり、道教思想と共に単一なる形式内に於けるバラエティーにとんだ讖緯思想の交錯したる特殊の仏説として考えねばなるまい。蓋し、空海、円仁、円珍の将来と伝えられる宿旺経（唐、不空訳、八家秘録には空海、円仁、円珍三家の

請来本）の内容に到つては、思い央ばにすぎるものがある。

（参考）日蓮聖人の場合に於ける勘文（予識的占文）

一、立正安国論奥書

文応元年之を勘ふ。……正嘉より之を始め、文応元年勘へ畢んぬ。……成去の剋の大地震を見て之を勘ふ。既に勘文之に叶ふ。

二、勘へ定めたる書「立正安国論」（顕立正意抄）

三、他国の為に此国を破らるべき由、勘文一通之を撰し

（宿屋入道許御書）

四、正嘉、文永の大地震、大長星を見て勘へて曰く。

（清澄寺大衆中）

五、一閻浮提の内に出現すべきなりと勘へて（法蓮鈔）

六、他国侵逼難起るべしと勘へたり（呵責誦法滅罪鈔）

七、禪宗は天魔の所為なるべし、のちに勘文もて之をつげ

しらしむ（法門可被申様之事）

尚ほ鎌倉期の神仏思想に投影したる陰陽道と道教思想の関連等の角度から、篋篋内伝の初期本等の資料も取り上げねばならない。

元来、仏教思想と陰陽五行思想のむすびつきは、中國にあつては文献的には後漢初頭の王充の論衡の「物勢篇」の記載事項あたりから、証明されねばならない。更に隋時代には、両者のむすびつきに道教が加はつて来る。隋書経籍

志の五行の項目から、これが察知される。これらの習合思想を源流として、日本書紀、推古記には百濟の僧、勸勤が来朝し、曆本、天文地理書、遁甲方術之書を貢するものもあり、大友村主高聰等が学習し、天武紀には占星台を興された記事が見えて居るし、大宝律の制定と共に陰陽寮、天文博士、天文生の配せられるあり、これが後世の安、賀、兩氏の所謂陰陽家の濫觴を示して居る。かの「政事要略」にみえた推古帝十二年の辛酉の政令説の基をなす例の「曆日を用う」の記事は、あまりにも有名な歴史的事項である。降て中世以降に入るや、源平盛衰記、愚管抄、篋篋内伝、叡岳要紀等には多数の両者の思想を交錯した事例が散見するものもある。

も早、今日に到る相様を、一応不完全乍ら形成して居ると云つてよからう。例へば、吾妻鑑の嘉禎元年正月二十一日の条にみえる「五大堂建立 相当 幕府 鬼門、方有 此地 云々」の鬼門や叡岳要紀にみえる「鬼門」や、又、吾妻鑑にみえる陰陽師の祭事等は、既に幕府なり、当時の公卿縉紳の間に於ける陰陽道の行事が、儒、仏的行事と混然と一体となつて居る事が証明できるし、当時のおびただしい雑記類や鏡類にみえる改元に際しての意義付け、又、その理論付けなり、その方法等に、考えねばならない実例が、沢山発見されるのである。

かの陰陽家の宝典とする伝安倍晴明撰の「篋篋内伝金鳥

玉兎集」(統類従本)の一部は、一応、鎌倉初期の創作と推定できるが、これによりこの両者の関係なり、習合過程を考察してみよう。

卷第一の劈頭の記事

「……中天竺摩訶陀国靈鷲山良、波戸那城西。吉祥天、源王舍城天王。名号商貴神。曾仕帝。积天居善现天。遊戯三界内。」

をみて、仏、陰陽二道の混然たる雑種性が判るし、又、卷二の「十干之事・十二支之事」を瞥見しても、五行思想と仏教思想と本地説の三者の幼稚なとり合せが、一見して明瞭である。その他、相生・相剋等の関係にしてもこの書の成立への疑問を加える資料に他ならない。

最もここで注意すべきは篋篋内伝中の讖緯説の思想である。即ち青竜・朱雀・白虎・玄武の四神相応地・八神吉凶事・二十八宿姓之事、三百六十日之宿等の項目にあらわれた雑思想の形態に注意されよう。正統外のこの讖緯説、即ち儒教的俗信仰なり、道教的色彩を持つ呪術が陰陽道となり、中国伝来のものと、日本在来の諸思想が、これにむすびついたものと考えてよいであらう。北山抄・師輔遺談・口遊愚管抄・江談抄等にも見える雑思想はこの陰陽二元観と木火土金水の五行説の抱着した雑信仰であり、占星術・天文曆法・讖緯説・易学・神仏思想等の習合した宇宙観と人生觀の習合であり、これらが、儒仏二教の正統外の俗信仰

として、これに含められた呪術が、密教系仏教なり、伝統的の神道行事とむすびついて鎌倉初期の宿旺道なり、陰陽道を形成したものと云つてよいであらう。

従つて火災を鎮める為の皇居の四方外角で行う鎮火祭なり、鬼・妖怪の都への侵入を防ぐいみの道饗祭なども、陰陽道思想による神道の禳祓であり、吾妻鑑五十二の文永三年正月の頃の慧星の変の御祈りの如きも、神・仏・陰陽三思想の雑乱の好例であらう。

陰陽道祭と神道行事が雑然として、公の席上、併用されて居るし、更に地方にあつても、寺社自身が土着の陰陽師に依頼して日の卜定なり方位の選定を活ばつに行つて居るし、道教的思想を基盤にした陰陽五行思想が、讖緯思想と共に神仏習合の過程に於て、喰い込んだ姿を見逃してはならない。

これを要するに、中世以前の神仏習合の理論化を山王神道なり、熊野権現思想を以て、その理論的結末と考え、更

に降つて中世期に入つては、両部神道なり、山王神道への変転となる史実を考える前に、讖緯思想が、陰陽道の一部分として果たした役割を考えたいのである。

中国の讖緯学的な、経世国家学的の思想のもつ任務はなれて、日本の中世以後にあつては、單なる宗教的呪術信仰を推進せしめる為に協力した結果となつたのにすぎない。神と仏の中間に雜て密教的信仰に流れ込んだものと、民間信仰として受容したもの、即ち陰陽道の二つに分れて變転したものと考えられる。次に中国讖緯学の系統と宿旺経の系統のものを別個に考えるか、同源のものと考えるかが問題である。

更に亦、推古朝の勸勒の星甲文上奏と、宿旺経請來の以前の儒教伝來時のものとを考え併せて、この思潮を伝教、弘法時代及び円珍・円仁の頃より以前の時代のものと、中古天台時に請來したものとの二つに分けて考えたいと思ふ。

(東洋大学東洋学研究所員、倭成図書館長)